

小さな村の大きな篤志者たち —ぬまだ村 明治初期の群像—

前田 勝世

明治四年十月、ぬまだ村は播但一揆の端緒となる騒擾^①に對峙していた。九郎平は皆を寄せ対処方を諮る。糸三郎は竹槍の準備を指揮する。鎌十郎と呼ばれて、政治郎と徳次郎が赴き談判する。新三郎等は孫四郎のもとへ折衝に行く。

半月後、不穏な事態は回避され村びとは安堵した。竹槍は畑の野菜の支柱と化した。ところが予期せぬことがおこる。政治郎と徳次郎が捕らえられたのである。飾磨官憲の面目のためだった。九郎平と糸三郎は放免の嘆願に駆けまわる。四年の暮れから五年にわたる断獄方の冬は寒かった。政治郎と徳次郎の衰弱した身に凍えた物相飯^②は喉を通らない。あたたかい茶粥^③が欲しかったことだろう。釈放されたとき、二人は瀕死の態だった。

明治初年、ぬまだ村は刻苦にめげず陋壁^④を打ち砕く志士たちの愛郷の息吹が萌えていた。それから十年、村びとの苦難は続

く。明治十五年六月八日。入梅^⑤まだ、新村町ノ上から出た失火は乾ききった前淵の田の麦藁^⑥に燃え広がり、強い南風を呼んで、集落に延焼した。六十余戸のぬまだ村は全焼したのである。法性山^⑦は焼失し古文書は灰燼に消えた。

村民は困窮の淵に落ちた。戸長源四郎^⑧は村びとを励ます。源四郎は一町二反の所有田地を売り払い、皆に配った。住民の不休の働きと源四郎の献身によって復興は早かった。十年後には法性山も再建される。

逆境のなかでも徳松は練習小学校で村の児童に読み書きを教えた。大火を機に数軒が西山筋へ分家した。畑地であった西山はこの頃村落らしくなる。この西山の豊受宮の境内に「至誠潤郷」と刻する源四郎の顕彰碑が建っている。

災難は繰り返す。ぬまだ村は明治三十六年にも火災に見舞われ、十四戸が燃えた。源四郎は身を粉にして救援にあたる。

明治期、ぬまだ村は幾たびの受難に直面したが、村民の血の滲む^⑨労苦と強い共助によって苦境を克服してきた。そこには源四郎たちの「村びとの一人の毀れも見捨てまじ」とする心と自己犠牲を厭わぬ^⑩尽力の支えがあった。

格差を憚らない昨今の世相のなかで、深い感慨を覚える。

源四郎は弘化四年（一八四七年）に生まれ、幕末を二十年、明治大正を生き、昭和十三年（一九三八年）九十一歳でその篤実な生涯を終えた。

今年はいなむら源四郎翁の七十年忌にあたる。

源四郎翁の命日によせて

二〇〇七・九・二三

西山在住 前田勝世

- ① ぬまだ村 馬田村の古称
- ② 法性山 浄土真宗西正寺の山号 佛性山とも称する
- ③ 練習小学校 福崎小学校の前身校
- ④ 西山（筋） 俗称出屋敷

（参考資料）

- 播但一揆裁判記録
- 三木武八郎日誌
- 馬田村田畑名寄帳
- 善太郎文書
- 二郎文書
- いなむら家関係者談



西山神社の境内に建つ源四郎翁の顕彰碑